

家族が出発してからやっと十一月十日いよいよ待ちに待った本国に帰国出来る日が来たのです。この時の気持ちにはなにごとにもたとえようがなく嬉し涙が出たくらいです。

貨物船改造の長運丸で十一月十三日函館に到着DDT粉剤で消毒され、一人七千円と引き揚げ証明書を買ひ函館上陸解散。

父親の親類の富山県香城寺の在所に行き、体の回復を待つて翌年二月、北海道札幌で検察事務官の試験を受け札幌区検に事務官として勤務中、心配していた家族の安否も福井県の家内の旧家に無事生活していることを確認したので安堵致しました。

折角区検に就職し家族全員集合して生活を始めようとしたが住宅難のため辞職し、叔父の世話で岩見沢幌内農協総務課長として採用され、職員住宅より子供達が元気な笑顔で通学する姿を見て涙がこぼれました。

農協も停年まで勤め、自家も建築し細々ながら年金生活で余生を送って居ります。

つくづく考えて見るに自分の人生は慌しい中戦争に敗

れ、着の身着のままの引き揚げ、人生の再出発、哀れな人生であったと思います。

終戦と引揚げの時のこと

北海道 河面真一

私の戦争体験は、他の人達の悲惨な体験から見れば、それはあまりにも小さい。しかし戦争前後の苦しみを味わった一人として、また異国の人も同じ苦しみをし、心から平和を願っていることを知り、ともかく戦争体験が風化しがちのいま、余命のある限り永遠の平和のため語り継ぐことが使命と考え、この機会にあえて拙文を残したい。

終戦当時、私は十九歳で樺太豊原市にいた。ソ連空軍による豊原駅空爆でちょうど苦難を乗り越え、やっとの思いで、たどりついた駅前広場には、樺太各地から大勢の人達が集結していた。

そこへ無残な爆弾投下、機銃掃射である。一瞬にして

阿鼻叫喚のちまたとなり、被弾し血に染まって死んでいく。わが子を背負って助けを求める母親の姿、手足の無い人、こうした死傷者を病院に運ぶ状況は、まさにこの世のものとは思われなかった。

また、その空襲で豊原市街の四分の一は燃えた。

幸い近所にあった私の家は延焼をまぬがれたが、そのときはソ連軍の進駐とあってほとんどの人は山手に避難し消火する人もなく、燃えるがまま放置され、あのサイレンの音もなく真っ赤なトタンが炎とともに舞い上がる。

夜となると一層凄惨、まったく火事場特有の騒然さがなく、貴重な市民の財産が二晩で灰になり、今まで体験したことのない一種独特の気持ちでなすすべもなく見守っていたことを思い起こす。

燃焼を免れた家や家財も、ソ連軍の侵攻と移住民の豊原市への転住により、同居させられたり、接収されたり、どこの占領地でも同じだと思います。

それから二年、苦難の抑留生活の後、北海道へ引き揚げることになり、真岡の収容所へ家族と共に向った。真

岡の丘の下に停車した列車から、持てるだけの荷物を持って丘の上にある収容所へ雨の中、すべる坂道を急なため転倒し全身泥んこで苦しみ、やっとの思いで丘にたどりついた。

なかには、泣き叫ぶ子供をしっかりと手を引き、大きな荷物を背負った婦人が雨の中転倒すると幼い子供が、不安と恐怖で一層大声で泣く情景を目前で見て、敗戦の悲哀を痛感したものだ。

その収容所の生活も苦渋に満ちたものだった。日本からの引揚船がなくなかなくて、千島方面から集まってきた人達も加わって、全部が寝ることが出来ず、身動きも出来ない状態だった。そこへときおり、上段に寝ていた子供の小使が横顔に落ちてくることがあった。

このように着の身着のまま三か月もいると、シラミがふえ、もう我慢出来ず、洗面器で肌着を煮沸したら、洗面器の底に片手ですくいあげるほどのシラミの残骸があった、このときはさすがに胸が悪く吐気を感じたことを忘れることが出来ない。

やっとの思いで北海道函館に上陸したのは昭和二十二

年十一月二十五日だった。生きて日本の国に帰れた感動は何と素晴らしいことだった。

それにしても、樺太豊原の市街の家々に終戦直後、白旗やら赤旗が揚げられていたのにも拘らず、あの悲惨な空襲は避け得られなかったのか、そう思うのは私一人だけでないだろう。

引揚げて北海道砂川町の引揚者収容施設に、着のみで生活し、ヤミ米の買出し、かつぎ屋、組の土工夫等の生活は、まさに生きるための精一杯の努力だったのは、引揚者一同、等しく体験した歴史的事実である。

私の戦争体験記

北海道 兼 松 淳 子

恵須取は炭坑や製紙産業・林業・農産物も盛んで、人口も四万人を越え、港を待ち、支庁所在地でもあり活気あふれた町でもあった。交換業務にたずさわっていた私、八月四日頃から通話通信も頻繁に悪い予感！誰もそ

れを話すことは出来ぬ。

八月七日突然、ソ連の飛行機襲来、夜は照明弾が町々をあやしく照らし、毎日日中偵察、夜照明弾、次の日から空襲、大きく黒い飛行機が低空にて爆撃、機銃掃射、十一日十二日一番ひどい爆撃、港町火災、十二日午後四時の勤務、浜市街まで歩いて局へ、母から短刀を渡された。言葉をかわすこともなく、無言で受取り元気で一言、それが家族との引き揚げてくるまでの別れであった。

夜の空襲はげしく局員とともに山の防空壕に避難、爆音が山に反響する。十三日朝突然ソ連軍上陸の知らせ、潜水艦、駆逐艦が出現、激しい艦砲射撃のあと上陸用舟艇、山つたいににげる。山の頂上から見たとき、ガスがかかった海の沖合に黒い船、沼の端山市街、中嶋町にくるまでに皆散りぢりになり、最後に佐藤さんと二人になり、町々も避難したと見えて、あまりの静けさに不気味、我が家も雑然、どんなにか急な避難命令かと佐藤さんと肝太まで走る。

武士町から少し行くと、避難の出おくれた人達が道路